

社員のモチベーション高める快適空間

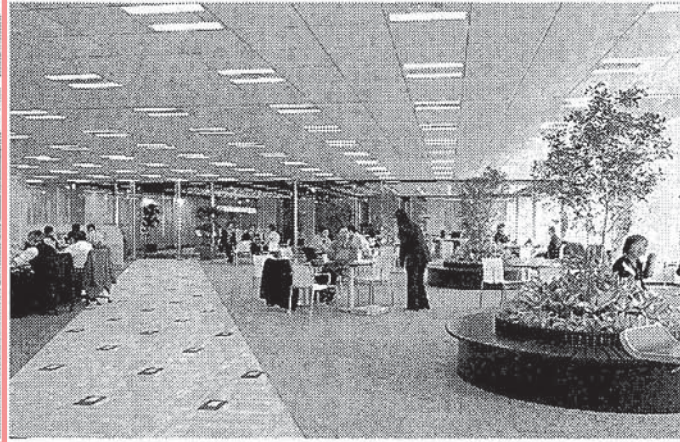
ITで新ワークスタイルに対応

激変するビジネス環境を流通させることができ、指示伝達が効率的にワークスタイルを模索する企業が増えている。その一つが、日進月歩の情報技術（IT）を最大限に活用する理想的な働き方の追求だ。ITの進展は遠隔地とのやり取りを容易にし、当事者同士が必ずしも時間や場所を共有する必要のない環境をつくった。電子メールやテレビ電話などを利用すれば、瞬時に大量の情報

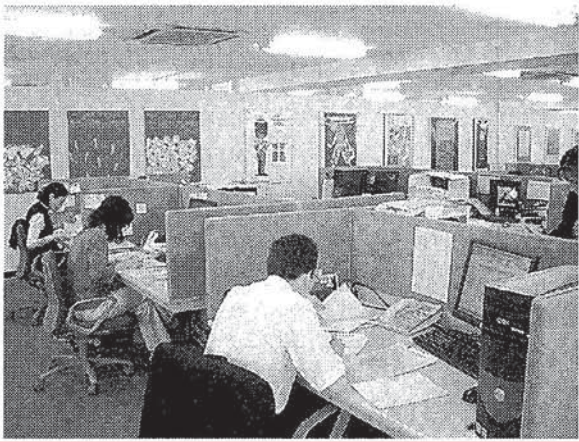
を流通させることができ、指示伝達が効率的に行えるようになったことで、企業は仕事を進める上で大きな力を得たのだ。

しかし、これまでどおりのフェース・ツー・フェースの対話にも重要性があることはいまでもない。相談や駆け引き、意図しない情報を引き出すことは直接的な対話やこれに付随するインフォーマルなコミュニケーション

の方がしやすい。理想的なワークスタイルの実現は、ワークシートの二面性を認識し、両方を活用できるワーカーの育



コーヒーを飲みながら公園で本を読むような気分で仕事ができるスペース（日本テレコム汐留コアオフィス）



壁にかけられた多数のアートは、創造力をかきたけると同時に安らぎを与える（アラヤ本社オフィス）

仕事をする楽しさを演出 遠隔地との対話スムーズ

成と、これを支援するワークプレイスの整備にかかっている。

ワーカーの五感を刺激

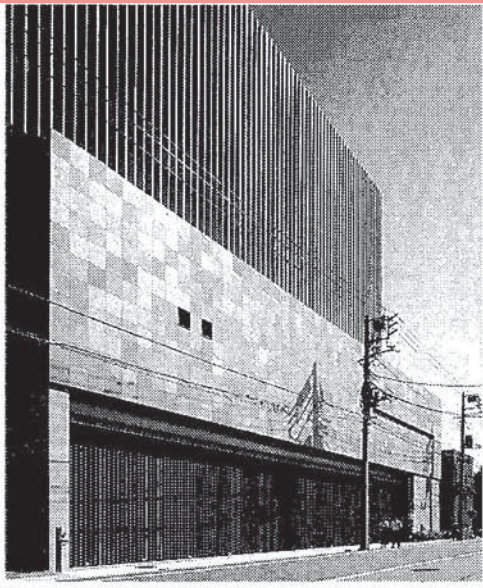
日本テレコム汐留コアオフィス（東京都港区）は、企業が勝ち残るためには生産性を向上させ経営のスピードアップを図るだけでなく、人間の創造力を発揮させサービス

に付加価値を与える必要があるという企業戦略を具現化したオフィスだ。まずワークプレイスを、①オフィスに必要な人と情報にアクセスする場、②デジタル&モバイ

ル時間と場所を超えて社内外とコラボレーションする仕組み、③アプリケーション情報デジタル化、④ナレッジ情報共有による自発的な学びの進化、という四つのレイヤー（階層）から構成されるものと考えた。そして、それらを調和させるために必要なさまざまなファシリテーターを整えた。その一つが、ワーカーの五感を刺激する仕掛けだ。例えば、街の要素を取り入れた「マーケット・パーク・スクエア」と呼ぶスペースは、仕事をする楽しさを感じてもらい創造力をいかんなく発揮してもらおうという狙い。ほかに、一人ひとりの社員がプロフェッショナルとしてモチベーションを高く保ちながら、創造性あふれる仕事のできる環境が随所にある。

海外スタッフと一体化

大きなガラスの扉を開けると、真っ白な壁に飾



昔ながらの町屋を連想させる外観は、近隣の街並みに調和している（新藤両国本社ビル）

られた色鮮やかな花の絵と自動演奏のピアノが目に見え込む。一瞬パリの画廊がカフェにいるような錯覚を覚えるのは、アラヤ本社オフィス（東京都目黒区）だ。同社はこの春、創立三年目を迎える翻訳会社である。インテリ

アライの翻訳者と校正者は、世界各地に散らばっている。無料インターネット電話ソフト「スカイプ」の導入で、国内だけでなく海外で働く社外スタッフとも、隣の席にいるかのようにリアルタイムでコミュニケーションをとることが可能になった。

オフィスの片隅に並んだ日本、ニューヨーク、そして支社のあるドイツの時間を示す時計は、代官山の小さなオフィスがグローバルなビジネスシーンへと広がっていることを物語っている。

2006年1月30日付
日本経済新聞社夕刊
「ニューオフィス広告特集」
より抜粋